

# 埋文にいがた

MAIBUN

新潟県埋蔵文化財センター

MAIBUN  
NIIGATA

2017 DEC.

第101号

発掘  
調査遺跡  
紹介

南魚沼市六日町藤塚遺跡・村上市上野遺跡



平成29年度秋季企画展「砂丘と平野の暮らし」展示作業（平成30年3月25日まで開催）



29年度  
発掘調査  
遺跡の紹介

## 六日町藤塚遺跡 —古墳時代の祭祀跡—

所在地：南魚沼市余川字藤塚

六日町藤塚遺跡は、庄之又川の扇状地に立地する古墳時代中期～後期の遺跡で、国道17号六日町バイパス建設に伴い、平成29年5～11月に調査を行いました。遺跡内では洪水や土石流の痕跡が見られ、たびたび被害を受けたことが分かります。遺構や遺物は地表下約1.6～1.8mの上層と下層の2面で確認でき、その間には洪水層が堆積していました。

上層の時期は古墳時代後期で、溝やピット、焼土などを検出しました。焼土の周りをめぐる人頭大の石も焼けており、その周辺からは多くの土師器甕の破片が出土しています。主な出土遺物は土師器ですが、複数の個体の破片がまとまって出土したり、一個体分がつぶれた状態で間隔をおいて出土しています。また土師器がまとまって出土した範囲からは、白玉も出土しました。

古墳時代中期末頃～後期の下層からは溝や

土坑、ピットなどを検出しました。下層で注目されるのは、腐って空洞化した木の根元から、祭祀に使用したと思われる土師器や白玉、勾玉形が出土したことです。土師器の種類は碗・甕・壺が確認でき、器の形を復元できるものもあります。白玉は碗や甕の中やその周囲から合計64点出土しました。また、この場所からやや離れた地点では、須恵器や土師器、鉄製品も出土しています。

今回の調査の結果、遺跡の特徴として、遺構が少なく建物も確認できないこと、焼土の周囲や木の根元に代表されるように、土器がまとまって出土することが挙げられます。そして、土器の近辺からは白玉や勾玉形など祭祀に使用する遺物が出土しました。このことから、調査範囲が祭祀と密接に関連していた可能性が考えられます。そのため、建物が確認できず、遺構も少なかったのではないかと考えています。(山崎 忠良)



焼土と土器・石の出土状況（上層）



木の根元から出土した土師器（下層）



須恵器・土師器・鉄製品の出土状況（下層）



出土した白玉（1目盛=1mm）



29年度  
発掘調査  
遺跡の紹介

## 上野遺跡

### — 縄文時代後期の集落 —

所在地：村上市猿沢

かみの上野遺跡は、みおもてがわ三面川の支流である高根川右岸の扇状地たかねがわに立地します。国道7号朝日温海道路の建設に伴い、平成29年5月から11月まで調査を行いました。調査した面積は約3,300㎡です。

調査区の地層は、西側の丘陵が崩落したことによる土石流と、シルト質の土壌が何層にも重なって形成されていました。慎重に調査を進めていった結果、土石流は少なくとも5回にわたって調査区に押し寄せており、その土砂に混じって大量の縄文時代の土器や石器が流されてきていることが分かりました。

出土した遺物は、南三十稻場式みなみさんじゅういなばしきと呼ばれる約4,000年前の縄文時代後期前半の土器が主体を占めています。これは、同じ村上市朝日地区の奥三面遺跡群おくみおもてで大集落が形成された時期とも重なります。また、数は少ないですが土器に混じって

さいし祭祀の道具と考えられる土偶どぐうの破片も出土しています。

今回の調査では、たてあなじゅうきょ竪穴住居などの縄文人の生活の痕跡を発見することはできませんでしたが、最初の土石流に含まれる土器には、その場で潰れたような形で出土し、破片を接合していくと完全に復元できるものが多いことが特徴です。つまり、これらの土器はそれほど遠くから流れてきたものではなく、調査区の西側のすぐ近くに大きな集落があったと考えることができそうです。

縄文時代以降では、中世の墓が2基見つかりました。中世の猿沢は、現在の村上市域に存在した小泉荘こいずみのしょうの中心部を支配した本庄氏の居城ほんじょうし（猿沢城）のある大きな町でした。調査区は猿沢集落のはずれにあたるため、墓地として利用されたのでしょう。  
(小野本 敦)



上空東から見た調査区（写真手前）



調査区の地層（白っぽい層が土石流）



縄文土器の出土状況



縄文土器の出土状況



## 縄文時代のアスファルト

アスファルトというと、道路の舗装を連想される方も多いと思います。ところが縄文時代の人々も、天然のアスファルトをさまざまな使い方で利用していました。アスファルトは、原油に含まれるタール分が固まったもので、黒くて粘りのある物質です。いったん溶けても冷えると固まる性質から、接着剤などとして大いに利用されました。

アスファルトが利用されたのは、北海道の南半分、東北、新潟県とその周辺で、現在までに1,200近くの遺跡で利用が確認されています。北海道と青森、岩手では縄文時代早期、新潟でも前期に利用がはじまり、利用エリア全域で後期中ごろから晩期に最盛期をむかえました。アスファルトは原油からできるものなので、北海道、秋田、山形、新潟などの油田地帯が主な産地です。そこから各地に流通して、太平洋側でも盛んに利用されました。阿賀町大坂上道遺跡出土の土器入りアスファルト（写真①）や胎内市江添遺跡出土の塊はアスファルトが流通する姿を示しています。特に、江添遺跡の塊の表面には編み物の痕がみられ、編み物で包んで運ばれたと考えられます（写真②）。

アスファルトは接着力が強く、水にぬれても接

着力が落ちないため、石鏃（写真①）や石匙、やすなど骨角製の漁労具や石製の網の錘などの接着に利用されました。太平洋側の貝塚でアスファルトが付着した骨角器がたくさん出土していることから、水に強いこと

が太平洋側まで流通した理由だとする説があります。ほかにも割れた土器の補修、色が黒いことから着色にも利用されました。

これまで、縄文人は油田で天然のアスファルトの塊を採取して利用したと考えられてきましたが、近年、アスファルトを製造・精製していた可能性が言われています。北海道や秋田、新潟の油田の近くの遺跡で、原油を煮た土器や不純物を多く含んだアスファルトの滓のようなものが出土したからです。新津油田に近い新潟市秋葉区大沢谷内遺跡でもそれらの資料が数多く出土しました（写真③）。出土品を見る限り、製造といっても原油を煮つめる、不純物を取り除くなどの作業だったようです。今後は、製造・精製の具体的な方法や、アスファルトの流通ルートなどの研究が進むことが期待されます。（沢田 敦）



写真② 江添遺跡出土  
アスファルト塊



写真① 新発田市青田遺跡出土アスファルト付着  
石鏃と大坂上道遺跡出土土器入りアスファルト  
（撮影・小川忠博）



写真③ 大沢谷内遺跡出土土器  
（提供：新潟市文化財センター）



埋文  
インフォ  
メーション

## 第22回遺跡発掘調査報告会

### 発掘！新潟の遺跡2017展を開催します

#### 第22回遺跡発掘調査報告会・ シンポジウム「丸木舟の考古学」

平成28～29年度に発掘調査を行った遺跡の最新成果について、発掘担当者が画像を交えて解説します。また、阿賀野市石船戸東遺跡で見つかった中世の丸木舟に焦点を当て、シンポジウム「丸木舟の考古学」を開催します。縄文時代や中世の丸木舟について報告するほか、赤羽正春氏から「大陸の丸木舟」と題しご講演いただきます。

- ◆ 日 時：平成30年3月4日(日)  
10:30～16:00（受付開始は10:00）
- ◆ 会 場：新潟県立生涯学習推進センター  
（新潟市中央区女池南3丁目1-2）
- ◆ 内 容：【発掘調査報告】  
阿賀野市土橋北遺跡（縄文時代）  
南魚沼市六日町藤塚遺跡（古墳時代）  
柏崎市丘江遺跡（中世）  
柏崎市宝田遺跡（古代～中世）

#### 【シンポジウム】

石船戸東遺跡と丸木舟  
縄文時代の丸木舟  
大陸の丸木舟

- ◆ 参加費：無料
- ◆ 定 員：175名（要申込み・定員になり次第締切・受付した方に整理券を郵送しますので当日お持ちください。）
- ◆ 申 込：2月28日(水)までに新潟県埋蔵文化財センターに電話・ファックス・メールでお申し込みください。



石船戸東遺跡の丸木舟を転用した井戸

#### 発掘！新潟の遺跡2017展

第22回遺跡発掘調査報告会に併設して開催します。遺跡発掘調査報告会で報告する5遺跡の最新の調査成果について、出土品とパネルで紹介いたします。展示品の多くが初公開となりますので、お見逃しのないよう、ぜひお越しください。

- ◆ 日 時：平成30年2月27日(火)～3月11日(日)  
9:30～19:00 土日祝日は17:00まで
- ◆ 会 場：新潟県立図書館 エントランスホール  
（新潟市中央区女池南3丁目1-2）
- ◆ 内 容：土橋北遺跡・石船戸東遺跡・六日町藤塚遺跡・丘江遺跡・宝田遺跡の出土品とパネルを展示
- ◆ 観 覧：無料



土橋北遺跡の縄文土器・石器



六日町藤塚遺跡の古墳時代の土器



県内の遺跡・遺物 99

小泊須恵器窯跡群・小泊窯跡群出土品102点

(昭和30年2月9日 県指定史跡名勝天然記念物(史跡)、平成17年3月25追加指定 平成27年3月24日 県指定有形文化財(考古資料))

遺跡所在地：佐渡市羽茂小泊

遺物所在地：佐渡博物館・埋蔵文化財整理事務所 管理者：佐渡市

小泊須恵器窯跡群は佐渡島南西部の羽茂小泊に点在する平安時代初め(9世紀)を中心とする時期に須恵器と瓦を焼いた窯跡の総称です。須恵器とは饗窯を使って約1,100℃の温度で焼いた灰色で硬い焼き物のことです。須恵器は古墳時代中頃(5世紀)に朝鮮半島から作り方が伝わった焼き物で、最初は大阪府堺市周辺で作られていましたが、以後各地に作り方が広がっていきます。

新潟県では飛鳥時代の終わりころから平安時代の初め(7世紀末~9世紀前半)にかけて多くの須恵器窯が築かれ、食器類や壺・甕などの日用品が作られ、近隣の村を中心に製品が流通しました。しかし、新潟県内の多くの須恵器窯は9世紀中頃から衰退します。

一方、小泊須恵器窯跡群は9世紀中ごろから須恵器作りが活発になり、佐渡島だけではなく越後にも流通するようになりました。また、富山市や、山形県鶴岡市にも小泊須恵器窯跡群の製品が流通しています。越佐海峡から漁網にかかって、小泊須恵器窯跡群で作られた甕や壺が揚がることもあります。羽茂小泊地区は、北西が日本海に面して

おり、当初から島外への流通を考えてこの場所が選ばれたのでしょうか。瓦は須恵器に比べると生産量は少ないですが、旧真野町に所在した佐渡国分寺の屋根に葺かれたことが明らかになっています。羽茂小泊地区で作られた瓦は、佐渡国分寺から出土する瓦の中では比較的新しいものが多く、国分寺が造営された当初のものではなく、傷んだ瓦を取り換えるために作られていたと考えられ、生産量が少ないのはこのためでしょう。瓦は須恵器と同じ窯で焼かれていたようです。

平成5年から14年にかけて羽茂町教育委員会・佐渡市教育委員会が実施した分布調査や試掘調査の結果、28基(以上)の須恵器窯の存在が推定できました。新潟県内の須恵器窯跡群としては最大規模と考えられます。

作られた須恵器が広い範囲で流通すること、佐渡国分寺の瓦を焼いていること、新潟県内最大規模の須恵器窯跡群と推測できることなどから、新潟県指定史跡と新潟県指定有形文化財(考古資料)に指定されています。(春日 真実)

写真提供：佐渡市世界遺産推進課



小泊須恵器窯跡出土の食器 (奥中央は溶着したもの)



小泊須恵器窯跡出土の壺蓋・長頸瓶



埋文にいがた 第101号 平成29年12月28日発行

発行 新潟県埋蔵文化財センター Niigata Prefecture Archaeological Research Center

指定管理者：公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 TEL:(0250)25-3981 FAX:(0250)25-3986

E-mail: niigata@maibun.net URL: http://www.maibun.net/

